

ら一. 日本カウンセリング学会第26回大会発表論文集(明治学院大学), 12頁, 1993.

3. 学生期, 青年期心理, 学生相談・グループアプローチの問題

〔著書〕

生徒指導と学生相談. 久世敏雄編『現代青年の心理と病理』(第4部 歪む青年の心とその援助, 第13章). 福村出版, 206-222頁, 1994.

〔論文〕

SPS と SPS 一学生生活を支え, 守る二つの制度〈巻頭言〉. 名古屋大学学生相談室紀要, 第4号, 1-2頁, 1992.

名古屋大学における学生相談ネットワーク形成のための基礎的研究—適応援助活動に関する学部教官への面接調査(森田美弥子・鶴田和美と共著). 名古屋大学学生相談室紀要, 第4号, 35-43頁, 1992.

3. ファシリテーターの感想文. 再び我が身をグループの中において. 自己発見のための合宿セミナー(人間関係体験セミナー)の報告(鶴田和美・森田美弥子・伊藤義美と共著). 名古屋大学学生相談室紀要, 第4号, 53-57頁, 1992.

小さな喪失ということ—その意味と感情・行動〈巻頭言〉. 名古屋大学学生相談室紀要, 第5号, 1-2頁, 1994.

グループの中に溶けこむということ(ファシリテーターの感想文). 自己発見のための合宿セミナー(人間関係体験セミナー)の報告(鶴田和美・森田美弥子・池田博和と共著). 名古屋大学学生相談室紀要, 第5号, 64-65頁, 1993.

シンポジウム「SPSに期待するもの—アメリカの大

学との比較」. 第30回全国厚生補導研究集会報告書(鳥取大学), 57-109頁, 1992.

〔口頭発表〕

アメリカの大学における学生サービス(シンポジウム「SPSに期待するもの」)第30回全国厚生補導研究集会. 鳥取大学, 1992.

4. 教育臨床, 教育的人間関係の問題

登校拒否児の適応を支援(1)登校拒否児の適応に関する調査研究(協力者会議). 国立中央青年の家所報, No.39, 23-29頁, 1993.

5. その他

名古屋大学における自己点検・自己評価実施について—2つのケーススタディ報告. 第18回コミュニティ心理学シンポジウム. 新潟大学人文学部/越後湯沢. (口頭発表), 1993.

面接 2. 平成5年度腎移植推進員研究テキスト. (社団法人)腎臓移植普及会/厚生省. 49-51頁, 1993.

老いと心—心の豊かさを求めて. 第5回全国生涯学習フェスティバル主催事業. 大学連続公開講座—クオリティ・オブ・ライフを求めて. 1993.

てらぺいあ「いのちのつながりのひろがり」. 『精神療法』第19巻6号, 529頁, 1993.

辞典項目: ロジャーズ. 森岡清美・塩原勉・本間康平編集代表. 『新社会学辞典』, 有斐閣, 1530頁, 1993.

書評: ジェラルド・イーガン著 福井康之・飯田栄訳 熟練カウンセラーをめざすカウンセリング・ワークブック. 創元社. 1992. 『精神療法』第19巻第4号(通巻77号), 84-85頁, 1993.

研究経過報告

速水敏彦

1. 「外発的動機づけと内発的動機づけの間」に関する研究

2. 3年程前から外発的動機づけと内発的動機づけという二律背反的な定義の仕方を改める必要を感じている。その実証をすべくデータを収集しているところであるが、結果の一部は第36回日本教育心理学会総会で発表した。また、その考え方については下の雑誌にもふれた。

速水敏彦 1994 やる気のでやわらかな構造 教育と医学 慶応通信 4-9

2. 自己成長力に関する研究

日生財団の助成による西田氏(名古屋大学), 坂柳氏(愛知教育大学)と共同研究で, 昨秋第35回日本教育心理学会では, 自己成長力検査の作成について報告した。そして発達的变化の検討も加えた形で本紀要に原著論文

としてまとめた。自己成長力の国際比較研究や自己成長力の働きかけについての調査も既に行っているのだからについても何らかのかたちでまとめていきたい。

3. 教師の雑談に関する研究

これはまだ研究発表をしてないが、院生の陳・浦上両君とともに開始した。今年は大学生と教師に対してどんな内容の雑談を聞いた(話した)のか、さらにそれによって親しみが增大するのか、成長力が增大するのかを問う調査を実施した。この結果の一部は梶田正巳編「成長への人間のかかわり—心理・教育学的理解(有斐閣)」に掲載する予定であるが、教師の雑談は子どもとの間の信頼関係を築く機能があり、動機づけの問題とも関係するものと考えている。

4. 児童のリーダーへの動機づけに関する研究

最近では学級委員に立候補する子どもが少なくなっているという教育現場の声があるが、それはどのような理由によるのだろうか。このような現実の問題から児童のリーダーへの動機づけの研究を院生の栗林君と始めた。これ

までリーダーシップ研究に動機づけという概念はあまり用いられていないが、新しい角度からの研究が期待できる。日本心理学会第58回大会でこの成果の一部を発表した。

5. その他

分担執筆

速水敏彦 1994 現代青年の感情と動機づけ 久世敏雄編 現代青年の心理と病理 福村出版 55-67

速水敏彦 1994 学習の動機づけ 増田末雄編 教授・学習の心理 福村出版 68-78

速水敏彦 1994 観察法・評定法を用いた評価の実際 北尾倫彦編 よさを発見する指導と評価 ぎょうせい 15-30

教育雑誌

速水敏彦 1994 発問が魅力ある授業を創る 月刊国語教育 5月号 東京法令出版 10-13

速水敏彦 1994 親の生活態度が子どもの学習習慣に与える影響 児童心理 6月臨時増刊 41-47

研究経過報告

—最近2年間の報告—

野口裕之

この10月1日で東海道新幹線が開業30周年を迎えた。30年前、今は政令指定都市となったある地方都市で、朝早く起きてTVの画面で東京6時00分発の「ひかり1号」の出発式の様子に見入っていたことがなつかしく思い出される。以来30年、新幹線は日本の主要都市を結び、乗客の死傷事故「0」を記録し続けている。10年後には中央新幹線が開業し、リニア方式でなくても、名古屋と東京とは1時間程度で結ばれる事になる。名古屋が東京・大阪の通勤圏に入ると考えるか、東京・大阪が名古屋の衛星都市になると考えるかは、人によるであろうが、何れにせよ技術の進歩は大したものである。

ところで、私自身のこの2年間の進歩はというと極めて遅々としたものである。何故、2年間かという昨年のこの欄に研究経過報告を書いていないからである。「報告すべきものがなかったからだろう」という天の声も聞こえる。誠にその通りである。

この2年間は、研究・教育ともに項目反応理論の実用化及び普及という事に重点を置いて来た。東日本旅客鉄道安全研究所からの受託研究である「コンピュータを用

いた適応型知能検査の開発」については、1993年3月と1994年3月に報告書を提出して正規の研究期間を終了した。しかし、それは受託研究としての区切りをつけたというだけで、研究そのものは現在も継続している。解決すべき問題は項目反応理論の「モデル」からパーソナル・コンピュータを媒体としてテストを実施する事に対する「受験者の反応」に至るまで多種多様である。成果の一部は、名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—の第40巻及び第41巻に発表した。また、1994年の日本心理学会及び日本教育心理学会の年次大会でも発表した。学会で口頭発表するのは久しぶりなので、緊張して足が震えながらOHPの操作をしていた。初心にもどった気分である。この受託研究及びその継続研究からは学ぶ事が多かった。例えば、パーソナル・コンピュータのDOSやC言語に関しては全くゼロの状態だったのが必要に迫られてある程度わかるようになった。少なくとも、過度に期待したり恐れたりすることはなくなった。昔から尻に火が着かないと動かないという悪い癖があったが、今もあまり変わっていないという事である。個別実験によるデー